# 父活PROJECT 2014 活動報告

2014.10.11　西森 寛

## ●「父活」スタイル（代表の想い）

未来の子供に伝えていける活動を通して、教育力ある家庭や地域を創造していきたいと考えています。子供たちの生活の基盤となる地域社会を、人まかせにするのではなく、ともに子供達に何を伝えていくことが大切かを考えながら実践できる場をつくりたいのです。

行動により、子供たちへの「ことば」を育て、コトづくりや場づくりを通じて人と地域を育んでいくのが私達の考える「教育力」です。

「ものことば」という「共創」の場に、これから親となる大人も子供も関わることによって「教育力」を身につけ、地域や世代間のつながりを「復活」させ、地域全体でその土地に生まれた子供を祝福できるようになりたいと考えています。

＜ビジョン＞
教育力ある家庭と地域を創造し、地域全体で支え合う基盤をつくる。

＜ミッション＞
家族や地域の課題を共有し、クリエイティブな活動を通して、
未来の子供達がみな豊かに暮らしていける環境づくりに貢献していく。

＜中期的な展望＞

1. １stステージ　実践研究ベースの「父活Project」初期の立ち上げ期

2. **２ndステージ　2013～2015「父活」を確立する**
   法人化及び組織化、事業モデルの確立

3. ３rdステージ　～2016　活動拠点を整備する
   子供や地域のためにつくりたいものを生み出せる拠点整備

4. ４thステージ　～2017　海外へのネットワークを確立する
   海外（アジア時差３時間以内）とのコラボレーション

●「ものことば」とは、

子育てに関係する「もの」つくりを通じて、
子供や家族、そして地域とつながり、
親として伝えたい「こと・ば」を育む取組です。
基本、毎月第４日曜日に開催しています。

2014年度は、年間の重点テーマ「衣」「食」「住」「遊び」「学び」の５つのテーマのなかで、「遊び」をテーマにしました。

子育てでは、親の世界観を押し付けるのではなく、子供と寄り添うことがとても大切だと考えています。「遊び」は子供と対話（コミュニケーション）するのに最適です。しかし、子供と一緒に遊ぶことが苦手な親もおり、安全安心を考えるあまり、身体を使って思いっきり遊ぶ機会も減少しています。

心理学者のピアジェやヴィゴツキーの理論を参考に、誰もが経験した子供時代の「遊び」について対話しながら、子供に対する眼差し、模倣から遊ぶにつながっていくインタラクション、単なる娯楽としてのおもちゃではないコミュニケーションツールとしての玩具（おもちゃ）を考えてみたいと思います。

１回目

日　時：３月23日（日）9時45分~12時00分

場　所：京エコロジーセンター3階　リサイクル工房

参加者：父親４名（30代3名・40代1名）、母親１名（30代1名）
　　　　他１名（プログラム企画関係者）

タイトル：「お父さんによる木のおもちゃづくり」キノタマワークショップ

新年度に先立ち、普段の活動の中心となる京都市伏見区深草地域で、父親による「子育て」や「遊び」を考える場をつくることにしました。

まずは主催団体からの提案として京都市右京区の京北地域の製材所（仲畑銘木店）に依頼し、北海道の「木育」でも有名な、タマゴのカタチの木を磨くワークショップ（以下WS）です。

今回「キノタマ」WSとしたのは、今回使用するヒノキが「火の木」や「日の木」から由来されていることから、父親が地域でも活動する機会の火種となるような意味をもたせて名づけました。

【当日の流れ】
ねらい：モノで「遊ぶ」、普段の「子育て」について意見交換する。
・父活プロジェクトの紹介と今回のワークショップの目的について
・参加者どうしの自己紹介
・今回使用した木（ヒノキ）についての話しと「キノタマ」磨きによる木のプールの共同制作についての提案
・キノタマ磨き作業
（磨きながら、普段の子育てについて参加者との交流も行う）
・振り返りとアンケート

参加者している父親や母親は、子育てについての関心が高く、普段の親の思いをきくことができました。
・子供に木という自然素材に触れさせたい
・子供にはいろいろな経験をさせたい
・仕事でなかなか時間がとれず、子育てへの後ろめたさがある
・いつのまにか大きくなっていたのではなく、日々成長する子供と一緒に過ごしたい
・それぞれの親は、得意なこと不得意なことがあるからもっと様々な人とつながることが大切だ

【結果、課題、今後の展望】
子育て中の父親の参加はやはり困難なのか、募集定員に満たない開催でしたが、参加された父親や母親からは、楽しかったという声をいただきました。さらに、乳幼児期の「遊び」について専門的な探究を行いたいと思います。

２回目
日　時：４月29日（祝日）10時00分~12時30分
場　所：ウエダ本社北ビル　３階
参加者：父親３名（30代2名・40代1名)、母親１名（30代1名）
タイトル「自信を育てる教育」レクチャー＆ハナスバ
講　師：福山絵美（カウンセリングルーム・エミュウ　代表）

子供との「遊び」で難しいのは、その自由である遊びを、未熟である子供に、親であり大人としてどのような居方や関わり方が大切なのか？ということです。自分達のルールややり方を押しつけてしまい、目の前にいる子が何を望んでいるのかを見過ごしてしまいがちです。平成26年版の内閣府による「子ども・若者白書」によると、国際的にみて日本の若者達（満13〜29歳）は、自己肯定感が低いという結果もでています。

親にとっては、初めての子育てです。人間形成の基礎が培われる重要な乳幼児期の子供にどんな教育・コミュニケーションが大切なのか軸となる指針を考えてみようということから今回の企画につながりました。
忙しい中一生懸命子育てしているのに子供がなかなか言う事を聞かない。どう子供に接していけばよいのか悩み、自信を失ってしまう。親と子がお互いに自信につながる効果的な教育・コミュニケーションについて、心理学の応用行動分析や行動理論から紐解いていくことにしました。

講師は大学院からトラウマ治療の研究を行い、現在カウンセリング治療を行っています。親子のコミュニケーションに関して問題意識をもっており、それは、カウンセリングに来られる人は、元々の原因が親子のトラブルであるケースが多いからだそうです。その元々の原因である親子のトラブルが起きないようにできないか、そんな思いからお話をしていただきました。

【当日の流れ】
ねらい：自信を育てるコミュニケーションの指針をもてるようにする。
レクチャー　・子育ての悪循環について
・応用行動分析や行動理論に基づいた教育について
・子育て相談実践例
・社員教育への応用
・褒めるワーク（１５分ぐらい）
質疑応答、講師との対話

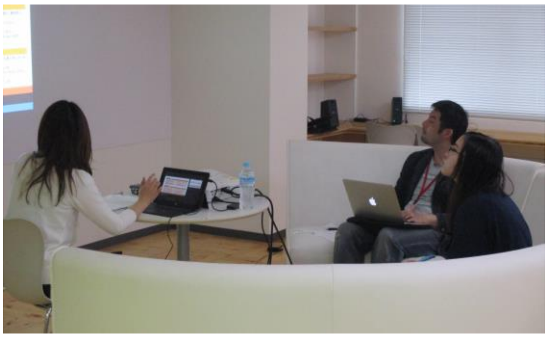
【結果、課題、今後の展望】
子育て中の親の子供に対する行動とそれによって子が受け取る感情のズレがある。そこで、「子供の行動に直接関わり変化させるのではなく行動の前後に介入し、子供の行動を変化させる」ということ。

行動前の介入では、環境を整えることであり、子供への指示を具体的なものにする。またその子が出来ない様な要求をしていないかきちんとその子供の特性や成長を把握することが大切ということ。

行動後の介入では、褒めることがとても重要ということ。
叱るということは、その行為がダメだとはわかるが、何が正解なのかが子供に伝わらない、褒めることで正解がわかる。だからこそ褒めることは大切であるし、また、どんなことがあっても失敗体験で終わらせるのではなく成功体験で終わらせることが大切ということ。

内容が難しいためか参加者は定員に満たない結果となりましたが、「遊び」での大人のスタンスや関わり方の指針を学ぶことができました。

福山講師


講師とスタッフによる開催前打合せ

３回目
日　時：５月18日（日）10時00分~12時00分
場　所：福寿園京都本店　６階
参加者：父親４名（20代1名・30代2名・40代1名）、母親１名（20代1名）、
　　　　他４名（プログラム企画関係者）
タイトル　「人と人をつなげるお茶と、人形や玩具からみた親と子の
　　　　　コミュニケーション」レクチャー＆ハナスバ
講　師：田中正流　（平等院ミュージアム鳳翔館学芸員、
　　　　　　　　花園大学・京都造形芸術大学非常勤講師）

５月は、新茶の季節にちなみ、京都の老舗茶舗の福寿園京都本店にてお茶について、これからの季節の水出し茶の淹れ方について学び、茶の木人形を題材にした人形や玩具についての文化的な背景や、現代の親と子に伝えたい大切な要素をプロジェクト関係者とともに学ぶ場としました。

茶の木人形

茶を淹れる行為そして人形や昔遊びの玩具について、現代の親たちにとって、ますます日常生活から離れつつあるモノであると考えています。お茶はまず自分で淹れて飲むことは少なく、伝統的な人形や玩具についても、その元々の意味や価値を、親から子にきちんと伝えていくことができていない現代的な問題があります。

昨年「食」をテーマに取組んできたときに、家族で共に食事をすることが、普段の親子のコミュニケーションの基本にもなるという話がありました。そこで、お茶を淹れることも「食」を通じたコミュニケーションにつながり、また京都の地域資源であるお茶を学ぶことは、京都に住む父親にとって意義のあることだと考え、今回の企画につながりました。

また、人形や昔遊びの玩具についても同じです。上巳の節句（ひな祭り）や端午の節句の人形、絵双六、貝合わせ、歌留多などの「遊び」に付随する玩具、話しながら教養文化を身につける玩具の本来もつ意味や価値についてきちんと知ることで、乳幼児向けのおもちゃづくりの参考にすることをねらいとしています。

【当日の流れ】

・Ⅰ部　「日本茶インストラクターによるお茶の淹れ方について」
　　　　レクチャー＆体験
・Ⅱ部　「人形や玩具からみた親子のコミュニケーション」
　　　　レクチャー＆ハナスバ

◎会場に乳幼児エリアを設け、今まで作成した木のおもちゃやレゴブロックを置き、遊びスペースを設けました。子連れの参加者は過去に参加したことのある父親と母親のため、子供については何かあればスタッフが対応するという体制をとり、年齢によっては、長時間の子供との参加が難しいと考え、２部構成による時間を区切っての開催としました。

【結果、課題、今後の展望】

お茶について、人形や玩具の背景や歴史についてとても関心が高く、参加者からもおおむね満足したという声をいただきました。

茶の木人形は、茶をつくる役目を終えた古い茶の木を使用しているという素材の意味だけではなく、壊れることにも意味があるという話しもありました。例えば、稲荷山の土でてきている伏見人形、五穀豊穣の縁起物として、役目を終えた人形は、自分の土地の土に戻すということ、張り子の虎も、その人形をつぶしてしまうことは、それだけたくましく成長した証であるということです。おもちゃについて、長く大切に使ってほしいという思いがありましたが、このように壊れてしまうということも大きなプロセスの一部にあるという、先人達の子供に対しての大きなまなざしを感じています。

子供の遊びスペースについては、2歳児の男の子が利用しましたが、空間や他の大人に圧倒されてしまい、ねらいとするところに効果的に機能しませんでした。2歳児は特に母親や固定の保育者の愛着の時期になるため、事前告知の段階で同伴の場合は3歳以上の子供とする必要がありました。

福寿園日本茶インストラクターによるレクチャー

田中講師によるレクチャー

４回目
日　時：６月２２日（日）10時00分～13時00分
場　所：稲荷の家 ほっこり２階
参加者　父親５名（20代2名・30代3名）、母親５名（20代2名・30代3名）
タイトル「竹の風車をつくろう！」
講　師：竹工芸職人　小倉智恵美（京竹籠花こころ）

６月は、子育て支援拠点との共催で、職人とのおもちゃづくりでした。「風車」というとくるくる回るのを見て楽しむ玩具のイメージがありますが、親子で「風」を体感しながらコミュニケーションできるツールであり、乳幼児と走る・回るなどの身体を使っての「実践的遊び」※1 の玩具として最適ではないかというと考え、今回の企画につながりました。

「竹」はすくすくと成長する縁起物の素材であり、京都市伏見区深草は、筍や団扇という「竹」で有名な地域です。また、竹林のある他の地域と同じように、深草地域も放置竹林の問題もあります。

この玩具づくりを通して、深草地域の身の回りの環境を知り、住んでいる地域で課題となっている問題や、親の子供のころ（小学生ぐらいまで）の「遊び」と今の子供の「遊び」をそれぞれ共有し、身近な自然素材を活かしたおもちゃづくりの意義を実感してもらうことをねらいとしました。

対話前のアイスブレイク中の様子

職人（中央左）とのものづくりの様子

【結果・課題、今後の展望】

「遊び」については、やはり記憶が鮮明にある小学生の頃、一人遊びよりも集団遊び、そして「規則的遊び」や「象徴的遊び」※1　が主に出ており、子供の「遊び」に付随する玩具については昔と今とは差が出来てきますが、遊ぶ行為については、昔と今では大きな差がないことがわかりました。

アンケートの満足度の結果から地域資源を題材した昔ながらの手づくりの玩具（おもちゃ）づくりの意義やおもしろさを実感していただくことはでき、前回の反省をふまえ、子育て支援施設のバックアップ体制を取り入れたこと、施設の利用者（保育士との継続的な関係がある）を中心に呼びかけたことで、乳幼児の子供と一緒に安心して取り組める環境で開催することができました。しかし長時間のものづくりは個々の集中する時間を要するため、短時間化できるキット化を検討する必要がありました。

※1　ピアジェの認知発達段階からの「遊び」の分類、0〜2歳の感覚運動段階における「実践的遊び」・2〜7歳の前操作段階における「象徴的遊び」・7·8〜11·12歳の具体的操作段階における「規則的遊び」のこと。

５回目
日　時：８月３１日（日）11時00分〜17時00分
場　所：京エコロジーセンター3階　リサイクル工房
参加者　父親５名（20代2名・30代2名・40代1名）、母親２名（30代2名）
タイトル「グリーンウッドワークで木のおうち＆お散歩椅子をつくろう」※2
講　師：ＮＰＯ法人グリーンウッドワーク協会 小野敦
協　力：家具職人 戸田由美（potitek）

８月は、木のおもちゃづくりとスツール（椅子）づくりを行いました。

木のおもちゃとして「木のおうち」は、「象徴的な遊び」として屋外（例えば公園の砂場）でも遊べるおもちゃであり、積み木と組み合わせても遊ぶことのできる親子のコミュニケーションにつながる玩具と考えました。

お散歩椅子として「スツール」は、家具職人である地域のお母さんがデザインした椅子で、親子で外に遊びに行くときに、持ち運びしやすい木の椅子ということだけでなく、バランスが難しい３本足の椅子が、子供の身体感覚を養う感覚統合の観点からも最適ではないかと考え、今回の企画につながりました。

※2 グリーンウッドワークは、伐採したばかりの乾燥していない生木から電動工具や大型機械を使用しないで、手道具のみでつくりあげていくものづくりです。

木のおうちづくりの様子（工具:銑の解説）

木のおうちづくりの様子（ペイント）

ティピづくりの様子（工具:銑で削る）

ティピづくりの様子（ロープを結ぶ）

【結果・課題、今後の展望】

乳幼児期の子供と一緒に参加しやすい短時間（30分程）のおもちゃづくりと父親（母親）と子供とが一緒に関わる長時間（3時間程）のスツールづくりを実施するというある意味挑戦的な内容でしたが、刃物を使う機会が滅多にない子供達にとっては興味深い体験になったようです。小学校低学年の児童のいる親達まで対象を広げることにより、世代間の交流や情報交換しやすい場をコーディネートできる可能性が広がりました。

６回目（最終回）
日　時：９月２８日（日）10時30分～12時00分
場　所：深草西浦南公園（京都市伏見区）
参加者：父親４名（30代2名・40代2名）、母親３名（30代2名・40代1名）
タイトル「お父さんたちからの贈り物～風と音楽のおうちをつくろう！～」
進　行：父活プロジェクト
協　力：ぴあぴあコミュニティサポート合同会社 音楽事業部

助成金事業の集大成として、今までおもちゃづくりで学んできたことを父親たちの手により、実際に乳幼児の子供たちとその家族を対象にした「遊び」の場をつくりました。ワークショップ全体を通して、子供だけでも遊べる要素と大人との関わりのなかでつくりあげていく要素を取り入れていました。

まず、環境として、まちなかの公園を選び、地域の人との交流の場であり、屋外で安心かつ身体感覚と感性をつなげられる場づくりを目標としました。

ものづくりは、和紙に絵の具によるペインティング、竹竿による「ティピ」※4 のテントづくりと音楽による木のタマ磨き、さらに、多年齢の子ども達で楽しまるような内容としました。

ペインティングでは、具体的な何かの絵を描くというよりも、テーマを設定し（今回は「風」）、イメージや身体の動きから三色（赤・青・黄）を自由に使って描く、見立て「遊び」、テントづくりでは、竹の竿を一緒に組み立てるという共同作業による「遊び」、木のタマ磨きでは、リズムや音楽に合わせ動き（磨く）をする「遊び」を組み合わせて行いました。

※4 ティピとは、アメリカンインディアンの移動式テント。ティピづくりは、環境教育のワークショップでも実施されている。

ワークショップの様子

【結果・課題、今後の展望】

今回の助成金事業での一連の活動を通して、乳幼児の「遊び」をより具体的に考えることができ、理論や様々な研究成果を参考にして「遊び」をテーマにした体系的な「ものことば」プログラム開発や地域の子育て支援団体との連携が可能となりました。

幼児とのいわゆる造形遊びに関わる大人（特にスタッフ）の言葉かけの行為は、子供の創造性を育む上でも重要です。今後も環境設定や援助について、どのようなスタンスをとっていくのかはきちんと協議する必要があると考えています。

様々な父親が集まり、ものづくりをする姿をみせることで、子どもや母親との関係への変化につながります。また、ものづくりは、父親による子育て参画のハードルを低くし、固定観念にとらわれない育児のあり方を考えるきっかけにもなります。もちろん、そこから直ちに、ワークスタイルやライフスタイルへの変化につなげることは難しいですが、継続的かつ定期的な取り組み（コトや場）にすることで、地域との関係や世代間交流が生まれ、人と地域を育み、地域で支え合うまちを育てていくことができるということを強く実感することができました。また、父親どうしのつながりという「よこの関係」と親と子の「たての関係」だけでなく、学生や地域の大人という、世代や環境を超えた豊かな人間関係（ナナメの関係）の場にするには、運営側にも幅広い層の人材が関わっていることが大切だろうと考えています。